

## サンフランシスコは激動中 (大阪大学海外拠点報告)



海外交流

谷本親伯\*, 一木朋子\*\*, 松山明江\*\*\*

Activity Report of Osaka University San Francisco Center for Education and Research

Key Words : COE, TLO, International Strategy, San Francisco, FARA, Education, Cosmopolitan, Distance-Learning, JUNBA, CalTech, Alumni Meeting, NAFSA

### はじめに

大阪大学SFセンターは、2004年4月に設置された。同年9月8日夕刻、シビックセンターのAsian Art Museumの壮麗なホールで宮原総長主催のレセプションが、そしてそれに続く2日間に、阪大21世紀COEリーダー(14名)による記念セミナーが開催され、本格的な海外拠点活動が始まった。センターの構成員は、センター長、副センター長、及び現地職員(Project Coordinator)の3名であり、2007

年7月時点では、それぞれ2代目、3代目、5代目となる。

当初は、COEやTLOなど研究を中心とする拠点であったが、より広い活動を目差し、2006年から「教育研究センター」と位置づけられている。阪大が、国際戦略を展開すべく北米(サンフランシスコ)、欧州(グローニンゲン)、アジア(バンコク)の3つの拠点を設けていることは周知の通りである。特筆すべきことは、全ての学部・研究科等を支援する機能をもつ海外交流拠点であり、当SFセンターは、シリコンバレー、スタンフォード大学、カリフォルニア大学バークレー・サンフランシスコ・デービス・サンタクルーズ・サンタバーバラ・ロスアンゼルス・アーバイン・サンディエゴ校、カリフォルニア工科大学(パサディナ)等に囲まれている。さらに、北に目を向ければ、オレゴン州立大学、ワシントン州立大学(シアトル)、プリティッシュコロンビア大学(バンクーバー)など教育・研究両面で世界をリードする多くの大学・研究機関が3時間以内でアクセスできるという条件に恵まれている。当然、人や情報の動きも激しい。

当SFセンターは、当地周辺に10を超える日本の大学の拠点の中で、唯一の、そして当然のこととして最初にFARA(連邦政府外国機関登録法)に登録されたものである。これに至る時間や労力は甚大なもので、大阪大学の国際交流に対する積極的な考えを反映している。研究拠点としての位置付けが多い中、大学としての教育の重要性を意識して活動されていることを強調したい。EUで展開されているBologna Processの動きや北米の反応も視野に入れて情報収集と交換を行なっていることを付記する。

### 基礎教育の重要性



\* Chikaosa TANIMOTO

1943年12月生  
京都大学大学院工学研究科修士修了(1970年)大阪大学大学院工学研究科・地球総合工学専攻、教授、工学博士(1981年)、地球総合工学、岩盤力学、トンネル工学  
現在、大阪大学名誉教授、特任教授、大阪大学サンフランシスコ教育研究センター長(2007年4月着任)中国敦煌研究院特別研究員、(財)国際高等研究所研究員  
TEL: 1-415-296-8561  
E-mail: tanimoto-c@osaka-u-sf.org



\*\* Tomoko ICHIKI

1976年7月生  
1996年関西大学社会学部社会学科卒、2000年大阪大学採用、総務部人事課、蛋白質研究所勤務、2006年10月より2007年7月まで大阪大学サンフランシスコ教育研究センター、副センター長、2007年8月より微生物病研究所勤務



\*\*\* Akie MATSUYAMA

1979年10月生  
2003年国際基督教大学教養学部国際関係学科卒、2006年University of Pennsylvania, Graduate School of Education Ms.Ed(TESOL)修了  
現在、大阪大学サンフランシスコ教育研究センタープロジェクト推進員担当

## 遠隔講義

「大学」の任務は、「知を創造」し、「知を伝達」し、そして、「知を発信」することにあることは論をまたない。最先端研究情報や知財の交換だけでなく、国際人の教育にも重点を置かねばならない。すなわち、「国際人」としての特別の資質を求めるのではなく、大学教育の所産としての教養と専門分野における考察力の向上を徹底するだけであるといっても過言ではない。あと必要なものは、情報と意思の交換を行う能力を備えることである。「人間力の向上」や「指導能力」は、必然的な結果であると考える。センター長は30年余、教職に就いてきた。勿論、研究活動も求められてきた。一番意識してきたことは、自分で考える力を磨き、論理的な表現が出来ることである。英語での表現は、日本語より単純であっても、常に論理的な構文が求められる。日本人の多くが英作文に苦手意識を持つのは、「曖昧」な表現に慣れてきたからである。理工系に先ず求められる英語力は、簡潔さと明瞭さである。正確に伝達する能力を問われているのであって、「外国語」を理解することではない。情報伝達手段としての英語が不可欠なのである。日本人全般に国際共通語としての英語での伝達能力の足りなさを「重大に考えてこなかったこと」が重大な問題である。これに対し、工学英語の延長線上で、米国西海岸を中心とする語学研修を実施し、今年で5年目を迎える。阪大としては、例えば、学生に対してはTOEFL iBTで最低68点(CBT 190点, PBT 520点)を要求するか、教授に対し、必要が発生すれば、即、講義を英語に切り換える能力が求められている。

また、阪大独自の国際インターンシップの提供も理工系やロースクール教育の中で発展しつつある。同窓会組織もこれを支援する気運になってきた。NAFSA2007(ミネアポリス市 参加者2100名。この中、米国以外から300名。)においても、エラスムス・スミントスの原型となったIAESTE/UNESCOの活動が、Short-Term Experiential Programs for Engineering Studentsの典型として取り上げられた。実は、阪大関係者がこの組織の中心を担い、センター長は国際組織のBoard Member(2003-2007)を務めた。今、IAESTE USAと連携して、シリコンバレーでのインターンシップの機会を設けつつある。

初代センター長(室岡義勝名誉教授・生物工学)の下で開始され、2007年度は3年目を迎える。「世界は今 サンフランシスコから」と題し、全学部1年生を対象として、1学期金曜日1限目、豊中キャンパスに発信されている。本講義の目的は、世界の経済・科学技術の最も動きの激しい、米国カリフォルニアのシリコンバレーとベイエリア(サンフランシスコ湾周辺地域、南北150km、東西100kmの範囲を指す)を中心に活動する日本人先輩の経験を伝え、国際社会におけるチャレンジ精神と勉学の在り方を学ばせることである。銀行重役、ベンチャー企業社長、弁護士、メディア社長など多岐にわたる講師陣である。これを講義順に示すと次のようである。

「世界遺産の保存：スフィンクスから敦煌莫高窟まで」(谷本親伯阪大SF教育研究センター長)、  
 「ビックサイエンスと国際協力 全ては霧から始まった」(竹田誠之日本学術振興会SF研究連絡センター長)、  
 「私の留学経験：ステーキとお寿司、国際金融情報」(松浦功Bank of The West取締役顧問)、  
 「新天地の醍醐味 ベンチャー企業を起こして」(榎本博之B-Bridge International Inc社長、  
 「チャレンジのすすめ」(下田範幸日本・カリフォルニア州弁護士)、  
 「ラジオ放送と新聞 言葉の不思議」(中川淳子SFラジオ毎日・北米毎日新聞社社長)、  
 「アメリカの若者文化におけるJポップカルチャーの影響」(堀淵清治Viz Media創始者・会長)  
 次に、2学期に対し、「学問のすすめ - 米国の大学キャンパスから」(Academic World-Insights from American Universities)を配信する。こちらは、英語にて、世界トップランキングの大学(阪大との交流協定校を中心)の講義を、学問や研究の面白さとそれぞれのキャンパスの特徴とともに伝えるものである。2007年度は、下記を予定しているが、一部未確定である。「技術的コミュニケーション」(筒井道雄/ワシントン大学)、「国際交流」(Peter Arzberger/カリフォルニア州立大学サンディエゴ校)、「地震工学」(Nicholas Sitar /カリフォルニア州立大学バークレー校)、「ITとナノテクノロジー」(西義雄/スタンフォード大学)、「栄養ジェノミクス」(Raymond Rodriguez/カリフォルニア州立大学デービス校)、「医学」(Akiko Iida Klein/コロンビア大学)、

「環境生物」(Michael Sadowsky/ミネソタ大学), 「教育行政」(Bryan Cole/テキサスA&M大学), 「共生科学」(小林肇/MIT), 「法学・陪審院制度」(福来ひろし/カリフォルニア州立サンタクルーズ校), 「歯学・生命倫理学・スポーツ科学」(John Ino/カリフォルニア州立大学サンフランシスコ校), 「地質学・防災科学」(Richard E. Goodman/カリフォルニア州立大学パークレー校)他.

#### JUNBA

当地に拠点を設けた8つの大学および教育研究行政機関の間で、情報交換や共同の活動を目的とするJUNBA (Japanese University Network in Bay Area) の中心が当センターである。2006年8月に創設された組織で、室岡前センター長が初代会長、現センター長が引き続き会長職を務めている。尚、会長は役員会にて理事の互選による。2007年1月11日には、米国内に事務所を持つ日本の学長・副学長・国際担当理事らによる第1回首脳会議(JUNBAサミット)をサンフランシスコで開催し、今後の活動方針をまとめた。翌12日にはスタンフォード大構内でナノテクの日米大学シンポジウムも開いており、日本の大学の存在感を示している。このサミットに参加したのは、大阪大、鹿児島大、九州大、慶応義塾大、東北大、法政大、横浜市立大、早稲田大、東京工大(オブザーバー)である。このサミットにて、国際化を共同で推進するための基本方針をまとめた。記者会見で発表された「アカデミアサミット宣言」には、大学の国際化に関する情報の共有、最新研究成果を米国に紹介する学術シンポジウム、各大学が米国で開催するイベントの支援、教育・研究協力、日米の最新の研究動向および共同研究の機会の紹介、国際産学連携での協力、という6項目が盛り込まれた。

この方針に従い、毎月定例役員会・連絡会(全会員を対象)・講演会等を開催し今日に至っている。講演会(もしくは話題提供)は一般公開し、日本総領事館講堂を主会場として、JETROや地元企業関係者も多く参加している。日本学術振興会SF連絡センターが事務局を担当している。一番最近の講演(5月9日)題目は、「シリコンバレーと頭脳循環：インド人と中国人のネットワークからの示唆」

であった。日本人の弱点を様々な立場から討議した。

2007年7月現在の参加校では、大阪大学・東北大学・九州大学・鹿児島大学・横浜市立大学・東京理科大学・日本学術振興会SF研究連絡センター等が活発に動き、東京大学・法政大学・慶応大学の活動はほとんど認められない。日本の大学のかかわりについて、「米国に事務所を設けず、情報だけ欲しい」ということへの対応が課題となっている。競争と協調には大きな推進力を生むにしても、その果実を手に入れるのに、それ相応の負担や貢献が求められる。(関連する新聞記事3), 4))

#### カリフォルニア工科大学総長就任式

2007年6月8日(金)10時より実施された。総長就任式及び学位授与式に宮原総長代理としてセンター長が出席した。同大学は、ロスアンジェルス郊外北東部に位置し、CalTech(カルテック)とも呼ばれている名門大学である。式典は、第113回学位授与式にあわせて実施された。第8代目新総長Jean-Lou A. Chameau博士は、フランスにて学士号を、スタンフォード大学にて博士号(土木工学)を取得した。その後、パーデュ大学の教授となり、地盤工学部門を指導した。ジョージア工科大学土木環境の部門長(1991)となり、国際的に著名なコンサルタントGolder Associates社長(1994-1995)に就いている。2006年9月1日、ジョージア工科大学副学長(provost)からカリフォルニア工科大学総長に転身した。学生教育、多様性、研究、起業、国際交流に対する情熱を買われたものである。センター長の専門と極めて近いことが出席して判明した。

式典はカリフォルニア工科大学評議会(Office of the Board of Trustees)が指揮し、ジャカラダが咲き乱れる美しい中庭を利用して行われ、来賓(42名)、教職員(150名)、学生及び保護者、合計約1000名が参加した。式典に引続いて、昼食会に移り、約200名が出席した。中国清華大学との交流が盛んと認められ、学長他役員数名の参加があり、プレゼンスを示していた。日本からの参加は、大阪大学のみであった。

センター長は、2004年、工学教育調査のため、Leiden, Oxford等を訪れた。700, 800年前の施設を保存し、学位授与式など年1回のみ使用するものも

あったが、壮麗な雰囲気の中漂う肅々とした佇も学府として必要であると痛感した。日本では学位授与式が簡素化され、場合によっては、学位記を研究室や事務室窓口で渡されることがある。学生が、社会に飛躍する時に当たって、一度でも厳肅な空気の中で感動を覚え、大学に誇りを持つ機会を提供するのも大学の役割かとも思う。

約500名の学生、一人づつに対し、学部長が名前を呼び、総長が学位記を渡し、博士号に対しては、フード(学術服着用時に不可欠)をかける光景は、感動的であった。センター長は、1985年、ロンドン大学の学術服にて、ジョモケニヤッタ農工大学の卒業式に臨んだことがある。この時は、何もない野原で、しかも4時間遅れの式典であった。遅れは、時のモイ大統領が暗殺を回避するため到着時刻を明らかにしなかったためである。しかしながら、卒業したばかりの若者の陽気さがすべてを救った。そして、国を荷う期待が緊張感を与えた。この記憶をジャカラダの花が誘ってくれる。この美しい紫の花は、北半球では5月、南半球では11月に咲き乱れ、日本の桜を彷彿させる。様々な思いが去来する式典であった。

服装(Academic Attire)について付記したい。今回の就任式・学位授与式には、参加者全員が自分の大学の学位用正装を着用した。また参加の数日前に、式典担当者から身分称号の確認があり、学位の取得を明瞭に示すAttireを着用するよう要請があった。ドクターバー(ベルベット/ブルー色)の明示である。大阪大学の場合、左側袖部に校章と共にOsaka Universityと付されているが、このようなマークは他大学には認められなかった。今回のカリフォルニア工科大学の学位授与式及び総長就任式に当たっては、学術服(Academic Dress)の意味が強調されていた。アメリカの大学全般に、標準的な取り決めが設けられていて、大阪大学のガウンもほぼこれに匹敵しているが、先述のドクターバー(博士号取得者はブルー色にて両袖に3本線)は入っていない。外国での式典参列に当たっては、プレゼンスを示すことが大切であると考え。場合により、代表者はPresidential and Trustee Robes(最高位を示すオレンジ色、4本線)を着用した方がよいと思われる。

2007年カリフォルニア工科大学学位授与内訳は次

の通り。(1) 学士181名・中、留学生22名(12.2%)。出身大学：中国7名(53.8%)、韓国1名(7.7%)、他5名。(2) 修士108名・中、留学生39名(36.1%)。出身大学：中国13名(61.9%)、韓国4名(19%)、他4名、アジア系合計21名(19.4%)。(3) 博士206名・中、留学生105名(51%)。出身大学：中国25名(53.2%)、韓国5名(10.6%)、日本2名(4.3%)、他15名。博士号取得者が4割を超えること、留学生が3割を超えることが見て取れる。

なお、カリフォルニア工科大学のランキングをU.S News & World ReportによるAmerica's Best Graduate Schools(2008 Edition)から抜粋すると、(1) School of Engineeringでは全米7位。2006年、研究費\$169,800,000、教授一人あたり研究費\$999,000。2005-2006年学位授与者151名、工学研究科大学院生合計601名。(2) 分野別：航空工学・宇宙工学分野1位、化学工学分野2位、土木工学分野9位、コンピューター分野6位、電気電子情報工学分野5位、環境・健康分野8位、機械工学分野3位。化学分野：生物化学4位、化学1位、地球科学1位、物理3位、数学7位となっている。

### 北米地区同窓会

2006年1月7日(土)午前10時よりホテルニッコーサンフランシスコにおいて、総長等と総勢50名以上の同級生との歓談会を催した。当日は米国に永住する76歳の長老から留学生の若手まで、ワシントンDC、バージニア、オレゴン、シアトル、ロサンゼルスからの参加もあった。阪大からは宮原総長、



写真1：2007年5月19日、ニューヨーク市コーネルクラブ  
第2回北米地区同窓会



写真2：宮原秀夫総長と神余隆博国連代表部次席代表特命全権大使（ニューヨーク同窓会にて）

鈴木副学長，辻留学生センター長，総務部などの出席があった。センター長（室岡）よりサンフランシスコセンターの紹介の後，宮原総長より法人化後の大阪大学の組織改革，コミュニティーデザインセンター，海外拠点，中ノ島センターの設立などを豊富な写真を用いての紹介があり，阪大を卒業して久しい同級生に感銘を与えた。

設立総会は，鈴木副学長同窓会連合代表幹事による昨年結成された同窓会連合会の紹介の後，議事に移り，理学研究科出身でPhyllom LLCのCOEである山本敬司氏が会長に選ばれ，幹事9名を決定した。同窓会規約承認，同窓会名簿の討議の後終了した。

記念講演は，阪大客員教授でBank of The West取締役顧問の松浦氏による「歴史は繰り返すか？」で，長年の海外銀行員としての経験に基づく興味深いものであった。その後，橋本理事の乾杯でレセプションが行なわれた。同級生のほとんどが互いに初めて顔を合わせた，外国の地で苦労した人達なのですぐに活発な交流がなされ，あちこちで感動的な懇談風景がみられた。同窓会というのは外国の地に



写真3：橋本日出男理事（ニューヨーク同窓会にて）



写真4：鈴木直副学長（ニューヨーク同窓会にて）

あってこそ心の拠り所として必要と思われた。

そして，2007年5月19日（土）午後5時より，ニューヨーク中心部Cornell Clubにて，第2回北米地区同窓会・講演会・総長交流会が開催された。出席者44名，阪大本部からは，宮原秀夫総長，鈴木直副学長および橋本日出男理事（国際交流推進本部長）である。谷本新センター長の司会により進行され，総長の「法人化後の大阪大学」に関する挨拶と講話があった。総会は，山本会長により議事進行がなされ，会計報告と共に，事業計画と幹事の選任を行い，同窓会会員間のより親密な連絡とSFセンターへの支援を決議した上，約30分で終了した。これに引き続いて，橋本理事の紹介により，法学部卒，国連代表部次席代表神余隆博特命全権大使による講演「国連の現状と日本の役割」が行なわれた。国際貢献における日本の具体的な立場と課題が伝えられ，その後の北米同窓生・総長との交流会ともに質疑応答や議論が活発になされた。レセプションは鈴木副学長の乾杯で始まり，予定時間（20：30）を大幅に延長する程の盛況であった。

SFセンターが事務を担当する北米地区同窓会には，2007年6月時点で462名が登録がされている。東部169名（New York & New Jersey 57名，Massachusetts 22名他），西部151名（California112名，Texas 9名他）である。2008年度総会は，ロスアンゼルスを予定している。

NAFSA

2007年5月27日 - 6月1日の期間，ミネアポリス

市にてNAFSAの年次総会が開催され、これに付随して56のワークショップが展開された。この会議の内容は、留学生への対応だけでなく、国際交流や単位互換、非常事態対応なども含む大きな課題を取り扱っている。大学からの参加については単独に行動するのではなく、分担を決め、情報収集の的を絞った方がよいと考える。この会議については、別稿にて詳細を述べたい。今年度の特別講演の目玉は、元国務長官パウエル氏（敬意をもって呼ぶ場合、General Powell）であった。NAFSAでの講演を意識したためか、留学生に関する内容が話されたので付記の部分で紹介しておきたい。

### あとがき

今回の報告は、新しいスタッフで行っている。本報告に触れていないものに、第39回北カリフォルニアさくら祭出展（2007年4月14、15日）、カリフォルニア州立大学バークレー校I-House75周年祝賀晩餐会（2007年5月3日）、サンフランシスコ・大阪姉妹都市締結50周年記念事業（2007-2008年3月）各種、理工系大学院生シリコンバレーツアーなどが挙げられる。改めて、次の機会に委ねたい。知財の取扱い、産学連携など大きな課題と共に、文理融合教育、地球環境教育への新しい取り組み、高等教育の枠組みにおける国際関係など標的は眼前にある。大阪大学単独ではなく、大学連合体として結果を求める時代に入っていることを痛感している。また、日本に居て得られる情報は限られる。この他に「居」を構えるからこそ入手できるものが多い。心からの御好意をもって本SFセンターを支援して下さい。皆様衷心より御礼申し上げます。

### 参考文献：

- 1) 室岡義勝：国立大学海外交流拠点ことはじめ - まずはサンフランシスコから、「生産と技術」第56巻4号，p.64-67,2004
- 2) 室岡義勝：遠隔講義「世界は今 サンフランシスコから」，「生産と技術」第58巻4号，p.1-3，2006
- 3) 日刊工業新聞2007年1月16日大学面：国際化後押しで連携，日本の8大学でサミット，情報共

有など方針決定。

- 4) 産経新聞2007年1月18日朝刊第1面：日本の大学世界に売り込め。

### 付記

NAFSAでのパウエル元国務長官の話から、留学生に関する部分を出席者（谷本）が報告する。次のとおり。

大統領補佐官を任じられた時の突然の驚き、冷戦終結となったゴルバチョフ・レーガン首脳会議の「お膳立て」の内幕、イラク戦争開戦時の苦悩の後、ニューヨークでの悪餓鬼時代から語ったことである。ホワイトハウスに執務してから、毎朝5時起床で、仕事に疲れた時は、いつも無性にNew York風ホットドックを食べたくなった。Red radish（からし大根）をたっぷり入れた懐かしい味。自分自身で外に買いに行く時、必ず何回もの身分確認を受けるが、国務長官と知って警備員は、「ホールドアップ」を解く前に礼を言ってきた。将軍、やっとグリーンカードがもらえました。ありがとうございます、と。やっとのことで、外部のホットドック屋に行ったら、店主から「あんた、TVで見かける顔だね。ひょっとして、アッアッ!!!」。そしてグリーンカードをもらってありがとうと言われる。USAで生まれていない人により、この国はこんなに多く支えられていることを知らしめられた。

「セプテンバ - イレブン」で、出入国を制限し、安全検査を厳重にせざるを得なかった。また、イラク戦争開戦に当たって、一番回避したかったのは、この私である。何故ならば、この中の誰よりも、戦時の悲惨さをこの眼で見ているから。戦争の何たるかは一番よく分かっている。しかし、やらねばならなかった。やる以上は、兵器を大量投入して、短期決戦で結果を出したかった。この話の途中で、かなりの人が席を立った。演説の開始時にスタンディングオベーションで迎えた人達もいる。反戦に対する強い意志を示したものであった。この当たりがアメリカらしい。この時、小生（谷本）が即座に思ったことは、同じ思いを持ち、同じことを決断した人物が日本にもいたことである。山本五十六元帥である。丁度66年前の太平洋戦争開始直前である。今こ

の紙面で、多くを語ると誤解を呼ぶ恐れがあるが、真珠湾攻撃に至る日本を困む情勢と同質ではないかと。個人の願いと国家の意思とが大きく食い違ってくる時に、責任ある立場の者がどのように決断するのか。いま、過去の戦争を反省するに当たり、国民の多くが世界の動きをどこまで知り得るであろうか。知らなければならない事実が多々ある。因みに、何故、September 11にテロが行なわれたか、知らない人がいるようである。アメリカで、助けを必要とする場合、「911」をコールする。日本の110番である。この転末を悔む米国人の思いがどこまで理解できるか。敢えて云えば、逆に、「広島・長崎」を感じ取れる米国人が何人いるであろうか。国際理解は「言うに易し、されど、行うに難し。」

元に戻す。Powell氏が続けるのに、「アメリカの

一番の武器は何か？」と問う。それは、「国を開いていることである。すべての国、すべての民族に移民を許しているということである。」と。そして、「留学生をもっと受け入れるようなアメリカであって欲しい」、「このアメリカの生活がいかに快適で素晴らしいものであるかを経験して帰国して欲しい」と結んでいる。

筆者は、国立大学に31年間、教職として奉職してきた。日本の大学が、日本への留学生に何をみやげに帰国させることができるか？学位？実は一杯ある。しかしながら、日本的官僚主義的発想で、「面倒なことを避け、体裁を重視している」ようでは見えてこない。この辺の議論を期待する。この点に関する小生の思いは、今回敢えて触れない。ただPowell氏の話に感動したことを残したい。

